思い出すことなど、二、三

――『論究日本文学』一〇〇号によせて――

木村一信

いまから振り返ってみると、四十数年という時間が経っているが、立命館大学の文学部がまだ広小路キャンパスにあった頃、ふとした縁から芥川龍之介の伝記研究において著名であった森本修先生を訪ねたことがある。私は、その時、関西学院大学大学院の学生であった。その折に、『論究日本文学』をいただき、先生のご論考はじめいくつかの掲載の論文を読み、そのレベルの高さに羨ましい感情を抱いたことが記憶に残っている。衣笠に移転する少し前、学内は古色蒼然としていて、狭いという感じはあったが、いかにも伝統ある学問研究の雰囲気に包まれていた。

その後、森本修先生は奈良教育大学に移られ、定年を待たずして逝去されたが、その蔵書を上田博先生や大学院生たちと先生のご自宅に通って整理をし、目録を作り、その多くを日本文学会が譲り受けて「森本修文庫」を設けたことも強い思い出となっている。

私が熊本から立命館大学に赴任したのは一九九〇年である。その翌年に赤間亮さんが着任し、二人が引率者として吉野へ恒例の日本文学会主催の文学散歩に出かけたことがある。学生の参加者は、二〇人あまりだったように思う。吉野はもちろん、古来、「古今和歌集」ほか多くの歌集に収録された名歌に詠まれたところであるし、「義経千本桜」などの舞台でもある。また、近代文学においても谷崎潤一郎の「吉野葛」などに描き出されている。

私たちは、吉野に一泊し、次の日に由緒ある神社や御堂などを巡って宮滝まで歩いた。その途次、赤間さんは前夜

の学生たちとの深夜まで続いたコンパでの飲酒が効いたのか、山歩きの途中でふらふらになって吉野の景観や史跡を目にする余裕がなかったようであった。吉野の地に繰り広げられてきた様々な歴史や文学の怨霊が作用していたのだろうか。

日本文学会が創立五〇周年を迎えた二〇〇四年の大会は、記念行事として〈世界の中の日本文学〉と題してシンポジュウムが開催された。ＩＣＵのツヴェタナ・クリステヴァさん、立命館大学のチャールズ・フォックス氏、それに日文専攻から彦坂佳宣氏、中西健治氏、木村一信（司会）が加わって発題と討議とが行われた。当初、韓国外国語大学の崔在喆氏も発表者の一人として予定されていたが、大会の直前にご身内に不幸があり参加出来なかった。その代わり、五〇周年記念号として刊行された『論究日本文学』の第八十一号に、「韓国における日本文学研究の状況と展望」と題した論文を寄せられた。ゲストの三氏によって、ヨーロッパ、北米、東アジアにおける日本文学研究の現状が良くわかり、有意義なシンポジュウムであった。ちなみにこの記念号の編集発行者が私になっていて、かつて森本先生からいただいた研究誌の奥付に名が記されたことに感慨を覚えざるを得なかったことも思い出す。

『論究日本文学』が、ついに一〇〇号を迎える。一つの中継点と言えなくもないが、やはりこれだけの号数を重ねてきたことは意味が深いだろう。と共に、この研究誌に掲載された専攻の教育・研究に携わる教員、卒業生、大学院生らの論文が学界に寄与、参画してきた意味も見逃せないと思う。また、日本文学会会員たちの刊行図書に関しての書評欄も、意義があることは言うまでもない。

私たちは、この期にあらためて『論究日本文学』の足跡を振り返り、その成果について検討し、評価を問うてみてもいいのではないだろうか。それが、次のステップへと踏み出す原動力の一助となるように思う。日本文学会と『論究日本文学』に連なる多くの先人や同輩、若い人たちへの敬意をこめて、一つの提案として書き記しておきたい。

（きむら・かずあき　本会名誉会員）